

みんなで話そう！ 二小の樹木とみんなの杜
～二小の仮移植樹木の説明会&これからを考える会～
11/4（土）9：40開場 10：00開始 12：20終了@二小体育館

〇はじめに

司会 A（プロジェクト共同代表/中谷） 今日はありがとうございます。ちょうど6ヶ月前の今日、ここで作業していました。GW中の仮移植作業。この場に戻ってきました。とりあえず木を動かして仮移植し、とりあえず仮移植の資金を回収しようとクラファンを始め、暑い夏がやってきて猛暑の夏には水撒き、養生をし、走ってきました。本来なら、保護者の方、地域の皆様と一緒にお話する場をもっと前につくることができればよかったと思っています。お詫び申し上げます。今日はできるだけたくさん質疑応答、意見交換の時間を取れればと思います。せっかくお天気も良く現場に近いので、中には入れないのですが、木の状態と一緒に遠くからでも周辺見学ができればと思っています。外で質問が出た場合はそれもメモして持ち帰って質疑応答、意見交換に移りたいと思いますが、いかがでしょうか？（拍手）今日は子どもたちも来ております。意見交換の最初に子どもたちの意見を聞ければと思います。

司会 B（二小保護者） 最終的に主役は子ども。管理しなければいけない大人の立場もありますが、中心に子どもがいて、そのために地域の大人たちに何ができるか、皆様にお知恵を貸していただきたいです。

司会 A いろいろなご意見を忌憚なく出していただきたいと思いますし、私たちも謙虚に聞いていきたいと思っています。皆さんの顔が映らないようにお写真の撮影と記録作成のために録音をさせていただきます。資料は教育委員会からの図面、私たちのチラシ、そしてご意見を残していくためにコメントを書いていただく用紙も用意しています。後日eメールでも大歓迎です。では、最初に、映像をご覧くださいながら、押田さんからご説明いただければと思います。

〇プロジェクトから仮移植作業と安全対策と樹木の現状について

施工担当者/押田 大地の再生関東甲信越支部に所属しております中央園芸の押田と申します。今回工事で現場監督の方を担当させていただきましたので、これまでの経緯についてご説明させていただきます。8分弱の映像に合わせてご説明します。

今年の3月の映像、満開の桜です。比較的枝先までしっかり花が咲いていて、結構元気な状態かなと思います。建物の移設に伴って、伐採予定の桜にピンクのテープが巻かれました。これを移植することになりました。5月3日から6日まで4日間、移植の工事を行いました。

木の枝をある程度剪定して、水脈整備をして移植を行います。こちらは「関山」という木。移植する木には全ての木に幹巻きをして、水分の蒸散を抑えます。大体3～5mの高さ、極限まで樹高を低くして狭いスペースに仮移植しました。

植える時には根杭を打ち込み、根鉢が動かないようにします。そして支柱をして、また何本も木杭を打ち込んで根鉢が動かないように固定します。

これは南側にあった一番大きな桜です。幹周りが260cmくらい。これも最後に移植しました。

4日間の工事が終わって、追加でヒマラヤスギなど何本かの追加の工事を5月13日に行いました。支柱の緩みなども確認しながら作業を行いました。

もともとあった桜も何本もあり、それに支柱を連動するような形で、移植した桜をギリギリのところで移植する作業でした。

7月23日に一度メンテナンスに入らせていただきました。土が詰まっているところはエアスコップという機械で空気を通し通気改善をし、南東側、道路の方に傾いているのではないかとご指摘のあったところは、追加で4mの支柱を6本くらい使って、番線で止めて倒木の防止の措置をさせていただきました。それから夏も近いということで、葉焼けをしないように黒いシートを覆い、枯れ枝の除去も行いました。土が足りないところは根鉢にかけて、これから迎える夏への対策をさせていただきました。

8月17日に住民説明会を行ったときに、住民の方からまだ倒木の危険があるのではないかとご指摘をいただき、8月30日にさらに作業を行いました。とくに心配されている南東の3本を、既存のヒマラヤスギに9ミリのワイヤーを計150mくらい使って張る（つなぐ）作業。

北東のモミジほか数本も、既存木がないので、単管を打ち込み、ワイヤーを留めるところをつくって、支柱をしました。力が分散するように2〜3本絡めながら結びました。

移植した木々の周りには点穴をあけ、通気改善をしていますので、既存の木も胴吹きしています。

最後、10月27日です。現状として何本かは調子が悪い木もあるのですが、全体的には新芽が出て、移植としては成功なのではないかという状況です。

移植したのが5月、造園の世界では難しい時期ではあるのですが、こうして芽を吹いたことは僕としても驚きで、また、今年の夏はかなり過酷な暑さだったのですが、保護者の方が一生懸命水やりをしてくださいました。根鉢を植えずに置く、というやり方をしたのですが、それは通気が凄く良くなる反面、乾きやすいリスクもあり、そこを水やりしてくださったおかげで、うまく夏を越せたかなという状況であります。

これから落葉する時期でもありますので、倒木の危険は極めて少なくなってくるのではないかと僕としては考えております。動画は以上です。

最後に、説明会以降、根鉢の大きさについて質問がありました。幹径の4〜5倍は必要であり、今回移植した根鉢がこの大きさが取れていないのではないかとご指摘がありました。この件についてこの数字を記載した日本緑化センターに問い合わせたところ、「『公共用緑化樹木等品質寸法規格基準（案）』は緑化用樹木等の流通のための指針であり、基準となる規格を設け、植木の生産や植栽工事の積算などの統一を図るために作成したものです。したがって、個々の樹木の移植などに適用するものではありません。」と回答のあったことをお伝えしておきます。

司会 A いろいろご質問等あるかと思いますが、樹木を観た後、後半たっぷり時間を取りたいので、そのときにご質問いただけたらと思います。

司会 B その場でご質問等あればスタッフにお声かけいただければメモを取ります。

○教育委員会から、安全対策と本移植の見通しについて

教育委員会教育施設担当課長/島崎 先ほど押田さんから説明のあった安全対策に加えて、教育委員会としての安全対策と本移植への見通しについて述べさせていただきます。

まず安全対策について。いま仮移植しているエリアが敷地の東側、道路に面しており、高低差があるということで、土留擁壁への負荷が心配というお声を前回の説明会でも頂戴いたしました。この擁壁ですが、昭和56年頃に造られたもので、最近のもののように誘発目地（*注1）と言われる目地が入っておりません。ですので、乾燥により、ひびが入りやすくなっております。この工作物に入っているひびは従前からのもので、構造クラックと呼ばれる深いひびが2箇所、乾燥クラックと呼ばれる浅いひびが複数あります。深いものは中央付近にございます。

これらのひびは仮移植樹木によるものではございませんが、今回の改築工事において補修を行う予定になっております。10月中旬に改築工事の受注業者さんによって雨の差し込みを防ぐために応急措置を行なっております。今後、外構工事を行う際に本補修を行う予定となっております。

土留の傾きがあるのではないかと、というご指摘もいただいておりますが、そういうことはない、と建築部門でも確認しているほか、私どもも9月以降5回ほど確認を行なっており、傾いていることはないことを確認しております。教育委員会としては直ちに土留擁壁が崩れる危険性はないと考えておりますが、引き続き経過観察を行うとともに、問題が見受けられれば建築部門とも協力し、対応してまいりたいと考えております。

本移植の見通しについてですが、今回の樹木移植につきましては、二小の樹木のいのちをつなぎたいというプロジェクト様の理念に共感いたしまして、SDGsや環境教育の促進の一環としてプロジェクト様と協定を結ばせていただいて、実施をいただいたものです。

学校施設でございますので、適切な安全対策を行うことが前提でございます。建て替え工事の支障にならないという条件はどうしてもございます。そういったことをふまえますと、教育委員会としては、現在の工事ヤード内に2箇所、2本程度の本移植が妥当であると考えております。また、本移植を行うにあたっては、樹木診断によって健全な樹木であること、そして施工に関しては、たとえば国土交通省ですとか、東京都などの公的基準等、何らかの根拠に沿って実施するべきと考えており、プロジェクト様にはそのようなご依頼をさせていただいているところです。

司会 B いまの教育委員会へのご質問も後ほどお願いいたします。後半でしっかりお聞かせいただきたいと思います。

司会 A では、プロジェクト共同代表の森田から二小保護者としての想いを共有させていただきます。

プロジェクト共同代表/森田 プロジェクトに入っておりまして、二小の保護者の森田と申します。私たちの本移植についての考え方と想いをお話しさせていただけたらと思います。私たちが大切にしてきた二小の樹木が、いま、仮移植という苛酷な現状を超えてもなお生き続けています。私たちとしては、できることならば一本でも多く二小の校庭に戻してあげたいと思っております。また、子どもたちを真ん中に、すべての樹木の行く末について、より良い方向性と未来を、皆さんと一緒に考えていければいいなと思っております。国立市全体、またプロジェクトにかかわってくださったすべての方にとって「よかった」と思えるようなゴールを目指していきたいと思っておりますので、今日はその足掛かりになればいい、このような会を開催させていただきました。

今後のスケジュールについては、4月末を目途に二小を含め、すべての樹木の移植先を探して、決まったところから順次移植していきたいと思っております。

奇跡的な樹木の仮移植から6ヶ月が経ちました。学校の協力もありまして、私たちは水撒き隊を結成し、限られた時間で必要な分の水やりを行ってきました。

今年は酷暑だったと思いますが、仮移植帯に入ると大気の蒸し暑さも感じないほどスーッと心地よい風が吹いて、私たちはやはり自然からの恩恵を受けながら共生していることを感じさせてくれました。

仮移植帯には蜂やトンボ、蟬、さらにはネズミまで現れて、本当に多様な生態系を生み出してくれています。樹木たちは生きようと、伐られた幹から本当にたくさんの葉を茂らせて、いのちの力強さを私たちにまざまざと感じさせてくれています。

伐採予定だった樹木が奇跡的にいのちを繋いで校庭に残っている、と聞いたときに、本当に子どもたちが喜んでくれました。移植の映像（ニュース）を授業で見せてくれた先生もありました。お手紙を書いて、私たちにくれた子どももありました。それが何より私たちの原動力でした。半年が経ったいま、子どもたちは何を願っているのでしょうか。子どもたちは生きている木が校庭に並んでいることを知っています。再び校庭に戻ってくることを本当に願っていると思います。私たちとしては、そこを置き去りにしたくありません。生き残った樹木たちがなんとか生き続けていけるように、皆さんで知恵を絞って、手立てを考え続ける姿勢を見せていくこと、それがやはり環境教育なのではないかなと考えております。

本移植については、私たちだけで決めるつもりはなく、広く意見を伺いたいと思っております。その上で協議を進めていきたいと思い、本日の会を開かせていただきました。

今日いらいしやれなかった方向けにもパブリック・コメントなどを開設して、子どもたちをはじめさまざまな方々の意見を伺っていけたらと思っております。

改築後の二小は地域のコミュニティ施設も担うと言われています。老若男女が集う新しい場所で、みんなで大事にしてきた樹木のいのちが受け継がれていくこと、みんなの想いで子どもたちやこの地域の未来をつくっていくこと、それこそがまさに国立市が掲げるソーシャル・インクルージョンの形かなと思っております。

最後にお伝えしたいのですが、5月に協定を結んでからさまざま私たちは走り続けて、この間、地域に開かれた情報でなかったことが不安を生み、不信感を募らせる原因になったと思っております。そのことをお詫び申し上げます。

今後は開かれた会にしていくための、今日が第一歩と考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（＊注１）コンクリートの乾燥収縮などで起こるコンクリートの亀裂などを建物の構造力学上、ひび割れが発生すると想定される箇所に故意に設ける目地

○樹木見学しながら説明（施工責任者/矢野）

（工事ヤード南側から遠目に仮移植帯を観ながら）

奥のほうに帯状に、現状 36 本移植されています。このうちいま 9 割くらいが芽を吹いて、発根状態が良好な状態で生育してくれています。

それぞれの植物が、枝と根っこのようにしがらむ「しがらみ構造」、しがらみ、枝がらみの支え合う構造で空気や水が通る、そういうしがらみ構造で今回の植栽は出来上がっています。

もう一つのポイントは、この帯状の中に、既存の樹木が 60 年足らずの時間、地上に枝葉を広げ、地下に根を広げて大地の中の空気や水が通る水脈を支えるように成長してくれていること。この根の立体構造と地上の枝葉がバランスを保って安定を維持しているわけですね。それが植物の基本的な構造なので、その既存の植物が大地の重みや空気や水の通る「脈」を支えながら地上に枝葉を広げてほどよい空気、風が抜ける、保たれる、そういう状態をつくってくれています。それで風が吹いても泥ぼこりが舞わない、雨が降っても泥水が流出しない、そういう状態が保たれているわけです。

その既存木の基本の環境機能に加えて、移植木がうまくしがらみ構造を持って、木杭と地上の枝葉、剪定された枝、すべて……40 本近い高木移植で剪定された幹から枝からすべての有機物がこの中に組み込まれています。そして根のしがらみ構造をつくっているわけです。

その隙間に、水や空気が流し込むように、移植した時の土をほどよく流し込んでいる移植。ですから、地上部も、幹と枝、もとあった有機物が地上に堆積した状態で、根のようにしがらみ構造をつくり、その隙間に土を流し込んで、土と木がお互いに支え合う形で既存木の上に盛土され、移植されている構造をしているわけです。

トータルの重さとしては土が載っているのと同じくらいの重さ。水分を含んだ幹を含めて何トンもある重みが既存木の上に載っかり、根を支え合い、それが「根杭」と言われる木杭で、大地に根を張って土圧を支え、空気や水の通りを支える構造のしがらみ植栽がここで出来上がっている。

その結果として植え付けられた植物が地上で呼吸ができて、真夏の猛暑の中でも、上から水が供給されると水蒸気が充満して細根が生み出されるということが起きているわけです。

その結果として、地上に新しい枝葉が生み出される。そうして、現状 9 割方息づきを保つ植栽が保たれている。

私たちの施工作業とお母様方の水やり管理含めた結の連携で生み出された、人のしがらみ構造で生み出された環境に、いろいろな動物たちが集っている。ただ集っているのではなくて、バクテリアから小動物含めた動物たちが、動けない植物が呼吸がしやすいように日常的にスクラム組んで生活しているわけです。ただ生活しているだけでなく、自然生態系的に結の連携が生み出されて、ここ全体に循環型の環境が保たれている。

大地の安定も、地上の安定も含めて、いわゆる「いのちを守る」安定がここに保たれている。木が重心バランスを崩して不安定な状態でいると、根の呼吸が伴わないと、一番上まで新芽を吹くことはできない。一番上の伐られたところから芽が吹いているということは重心バランスが保たれている証拠なんです。大地の一番下からポンプが作動する状態になっていれば、つまり重心バランスが取れていれば、根の呼吸のポンプが働いて先端まで水を上げることができる。これが倒れるような不安定性を持っていたら芽を吹くことはできない。

私たち職人業界はそれを体感学習して木を植えていくわけです。体で揺すって、木杭を打ち込む圧力含めて安定性を五感測定しながら組んでいく。それが全体のバランスを保つ。

昔の人たちが木組の建物を建てるときもそうで、昔の木造建築などは特にそうですが、木組で組みながら体で揺すってその安定を計っている。これは数値化できないわけです。

だから職人は数値にはならない現実をうまく体感測定し、体感科学と言ってもいいと思うんですけど、それをやることによって、最後良い状態になっているかどうかは、生の現実が表情で示してくれる。それを五感で測定する。いい状態になっているか、いないか。ここが大事なポイントです。

ですから、ここを計り間違えると、木が倒れたり、ポンプが上がらなくなって木が枯れてくる、そういう現実が起きてくることになる。

私たちが許す限りできるだけのことです。時たまのメンテナンス含めてやらせてもらいましたが、いろいろな制限があって十分にここに対応できなくて、この間ここまで来ました。100パーセントではありませんが、何とかギリギリ実用的な状態を、皆さんとスクラム組んで繋いでこれた。

いのちを守る作業は、不可能と思われることがあっても、大事にみんなでスクラムを組んで、繋いでいくことができる。生態系と同じ、動植物、バクテリアも含めた生き物環境と大地の環境と気象の環境、この三つの環境がスクラム組んでいわゆる循環の機能を保っている。それが自然と言われる世界で、その状態が人の作業の中で、壊された自然の中であっても「なんとかなるよ」ということを、ここの植物たちが見せてくれていると思うわけです。

これから、9割息をしてくれている植物たちをなんとか生かす環境に持っていくわけですが、社会でいろいろ制限がある中で、うまくそれを繋いでいくと、不可能な環境も実は可能になって見えてくる。そのことを教えてくれていると思うんです。

（移動して東側道路からフェンス上に見える仮移植樹木を観ながら）

このフェンスに沿って、島崎さんが説明してくださったコンクリート擁壁がこれです。何トンもの土圧を支えている。そしてフェンスを支えている。そこに、さっき押田さんが説明してくれたしがりみ構造で全体の重心バランスを保つ植栽が施されているわけですが、これだけの人の構造的な作業含めて大地の中の脈が全部繋がるのは難しいこと。これだけの重みを含めて土圧がかかる中に、自然の状態の脈の機能が損なわれないように保つのは非常に難しい作業なんです。なんとかそれらがつながって、全体が苦しみながらも息づいている表情。既存の木も、周りの植物たちの重みを背負いながら、真夏の当初はこちらの左側の八重桜は枝枯れを起こして弱っていましたが、空気を入れたりメンテナンスをして、いま紅葉をしています。苦しい状態だということになってくれない。なんとかこの八重桜の呼吸が上がってくれたというのがこの表情からわかる。この猛暑を超えて、全体的に根周りに植物の有機ガスがこもりがちになるわけですが、なんとかそのガスを抜きながら、新たな植物たちの新芽や根が息づいて、全体には呼吸を保っているのがそれぞれの植物の表情に見てとれます。

この真ん中あたり、ここが植物が弱っているところ。ここが空気や水が寄るところなんですね、地形的に、たぶん。雨が降ると泥水が寄る。ここに植物の傷みが見てとれる。ここが放置されないうで、メンテナンスで徐々に呼吸を回復する手立てが必要で、安全含めて見ていく必要があるわけです。

○意見交換、質疑応答

司会 B 後半、まずは子どもの声を聞きましょう。

子ども A/二小4年生 私はかりいしょくした木を二小にのこしたいです。大人が子どもの気持ちをきいてくれたのにそのせいで大人が争う姿は見たくはないし、悲しいし、不安に思うし、その話し合い方が正解なのかな？ と思うし、争わないで解決してほしいです。まず子どもの意見も聞いてほしいです。

あと、木があるとうれしいのは日陰ができるし、涼しくて学校の玄関まで行くときも教室の中も体育の時間も涼しくてサイコーだからです。私はまぶしいのが病気でにがてなので、木のしたはまぶしくなくて安心して外にいます。

あぶないからどかしてほしいというその声のことを聞いてせっかく救えた木の命を、また失いたくはないし、その木たちにも他にできること、そして役立つことがあるからこそ、最初の計画にしてほしくはないし、その木、その木に大切な命があるから、春にはきれいな桜が咲き、夏には涼しい日陰ができ、秋にはきれいな枯葉やモミジなどが見えて、冬には綺麗な雪の桜が咲いて、春夏秋冬いろんなきれいな木を見れるから木は残したいです。

木をいったんどこかに置いて後者が出来たら木を校舎に持ってきて木を植えてほしいです。もし全部植えられなくても、残りの木をチップにするのではなく、残りの木を国立のどこかに木の森を作ってほしいです。

子ども B/三小3年生 地球があって、その地球の全部のいのちの中から、まずは樹の話から説明します。樹は人間にとって大事な植物。息もあげるし暑い時に陰も作ってくれます。

樹を切ったら、最後に人間が死んでしまうから、樹を切るのは人間も切るみたい。

その人生がまだ終わってない時に切ったらダメ。樹はとても大切だし、いろんな意味もあって、その意味をわかってくれる人が東京の国立にきてくれて、二小の桜のプロジェクトをやってくれた。それがとても大事。それを忘れません。

子ども C/二小4年生 なぜ木を戻したいかというと、思い出があるから。いつも見守ってくれていたから、だけではなく、イライラしている時でも木にちかよるとあんしんできて「もういちど」というきもちになれたのです。これはあたらしく入ってくる木にはできないと思います。なぜなら思い出がつまっていなかったからです。

あたらしく木をうえて思い出をつくるのもいいと思いますが、やっぱりみんなの思い出がある方が、わたしたちにとってはとてもうれしいです。またあたらしい二小にもどってきてほしいです。そして入学してきた子たちとも思い出をつくってほしいです。

司会 A 子どもたちで他に発言したい方がいれば、考えておいてください。お手紙が届いているそうなので読み上げてもらいます。

二小保護者からの手紙（読み上げ）本日は家庭の都合でこの場に参加できず、文書にて失礼致します。水撒きやメンテナンスに度々ヤード内に入れていただき、樹木の様子を見てきました。仮移植の樹木の内部に入ることもありましたが、木々が倒れそうと思ったことはありませんし、危うさを感じることも一切ありませんでした。

ごく少数の近隣住民・保護者から倒木の心配を受け、大日本土木さんにはヤード内が見えるように透明なフェンスに変えていただいたり、災害が起きた際に仮移植の樹木が歩道でなくヤード内に倒れるようワイヤーで内部に引っ張ったり、数々のご協力をいただいた様子を間近で見まいりました。

二小に関わる方からの、倒木を心配する気持ちも十分わかります。事故が起こってからでは遅いので。

ですが、多方面にわたり十二分に安全対策をとってくださっていることも感じております。今後の本移植への方向性は、子どもたちの意見を第一に考え、工事の工程と合わせて可能な限り子どもたちの意見も汲み取っていただいた形になることを望んでおります。

現在、二小に通っている子どもたちの声を一番に聞いてもらいたいです。

仮移植されている樹木が、現実的に全て二小内に移植できなかったとしても、仮移植決定から本移植までの流れを記録することは、今後小学校の建て替え工事が控えている国立市では貴重な資料だと思います。

今後、本移植が実現された際には「旧校舎のそばにあった樹木は、建て替え工事後の新しくなった二小でも、移植という技術でみんな（子どもたち）をずっと見守っていてくれる」ことを伝え続けたいです。二小の児童を一番に考えた移植になりますよう望んでおります。

司会 A では一番近い方から一言ずつ、感想でも質問でもお願いします。

大人参加者 A 国立在住です。今年の春、久しぶりに桜が咲き乱れる二小を訪れ、こんなに凄かったのかと感激しました。学校は桜が似合うと言われていますが、二小は桜に囲まれて、本当に桜の園、という感じでした。

そこから始まったこのお話。今日、2本だけ、どこかヤードの中に残すとかいう話を聞いて本当にショックです。それはないでしょう！という気持ちです。

合意形成がなかった、という話もありますけど、矢野さんという人物とそれを取り巻く二小の保護者の方、子どもたち、それがたまたま一致した、そして教育委員会がそれを受け入れたという素晴らしいアクシデントがこれを招いた。先に文書で合意を取ろうと思っても無理です。

これを何とか成功させるのが市民の力かなと思います。私の夢はこの西側にせめて何本か並んでいること。そのほうがカッコいいんです、何本か仲間がいるほうが。それを見せていただきたいので是非お願いします。

大人参加者 B 大学通りの横に住んでおります。教育委員会も一生懸命やってくれてここまで来ました。思い起こせば、駅舎の問題とすごく似ているなあと思います。駅舎も市民が残すということで、行政も最初は渋っていたけれど最終的には行政も残さざるを得なかった。

もうちょっと前から余裕を持って連絡してもらえば、もっとみんなで考えられた。合意形成が難しかったのも、建て替えがもっと何年か前に知らされて、みんなが動き始めていれば、もっと難しくなかったのではないかと。

でも駅舎をやった人たちの熱意と今回の保護者の方々の熱意は大変なものがあって、最初は全部伐採という話からスタートしていますので、やっぱり熱意が山を動かしたと思うんですよね。さらなる山を動かしてもらいたいと思います。

この事業は、戦後のまちづくりの、学校を作っていく中での、とても大きな問題を孕んでいて、日本中で抱えている問題だと思います。国立でもあと11校で建て替えが起こってこの問題が起こってくる。それは日本中で起きている話。これを全国的に自分ごと化して考えていきたい。

大人参加者 C 私の言葉はわからないと思うので意見を書いてきました。

（代読）北に住んでいます。私の父は、私が幼い頃、オモテに出ては危ないと言いました。しかし、オモテに出なければいまの私はありません。私の子育てはなるべく裸足で育てました。自然の中で風や日の光や木の硬さ、軟らかさ、冷たさ、温かさを感じながら育つのは貴重です。

今回、公教育の二小の中でお子様方のお声を受けて一本でも多く木を残そうという国立市の教育は素晴らしいと思います。

前回の説明会で聞いた矢野さまの樹木の植え方は、しっかりとした安全性があります。

私が一番心配なのは、お子様方のお声を聞かないで、大人同士が対立し合って素晴らしい自然との共存が潰れていくことです。

大人同士が決めたことで、お子様方までが孤立しないかということです。大きな自然の流れの中で人間による自然破壊が後をたちません。公教育の中で一本でも多くの樹木を残そうとする教育の方向性は素晴らしいと思います。

大人参加者 D 国立に住んでいます。教育委員会に聞きたいのですが、最初は3～4本と聞いていましたが、結局40本近くの木が移植されて、整地されましたよね。工事業者さんの整地費用が浮

いていると思うのですが、それは一体どうなっているのでしょうか。矢野さんたちが整地されたので、その費用が浮いていると思うので伺います。

大人参加者 E 二小の保護者です。教育委員会に伺います。本移植に対して都のガイドラインに基づいて1〜2本と仰ったと思いますが、その根拠を伺いたいと思います。子どもを二小に通わせていて、木というより子どもの安全というのがもちろん一番大切なことなので、子どもが本移植したいなら、大人が安全かどうかきちんとガイドラインに沿う、ということがみんなの合意をとることにつながるといいますので、ガイドラインについてご説明いただきたいです。

大人参加者 F 学生時代から国立に20年くらい住み、今は多摩市の恵泉女学園大学に勤めております。今回こうして桜の生命力を見させていただいて本当に感動いたしました。今年いろんなところの桜を見ると、葉っぱがかなり落ちてしまっていると思うんですね。それがしっかりと枝を伸ばしていて、葉がしっかりとついているということは、根がしっかりとついているということ。私も専門は農学で園芸ですので、しっかりと息づいているということなんですね。それで1本や2本だと、ある程度集団でないと生きものは育たないということは科学的に証明されてきています。せっかく生態系が残されているので、それを何らかの形で、1本でも多く残して、生態系を続けるようにしていただきたいと感動しながら思いました。

大人参加者 G 二小の保護者です。私も60年くらい前にこの学校を卒業したんですが、その時は桜の苗木がこんなにも大きくなっていくとは思いませんでした。この学校には3人の子どもやいま孫が通っていますが、桜の木に対する思い入れは誰にも負けない気持ちがあります。今回のことについては新聞で見て、凄いことをやってくれたと感動して、ファンドにも協力したいと思ったのですが、実際に見て、これはちょっと違うのではないかと。というのは、移植したのではなくて置いてあるのだと。もし、これが通学路の方に倒れたら、大変な事故になるんじゃないかと思ったんです。

相模原市のキャンプ場で倒木の事故がありました。調べてみたらそういう事故っていうのは全国にいろいろあるんですね。学校内でも起きています。校長先生が死亡された例もあります。そういうことを踏まえて心配になり、駅舎でやっていた報告会でプロジェクトの方に、「これは本当に大丈夫なのか」と聞いたら、「造園のプロがやったので大丈夫です」と。

教育委員会にも聞いたら「プロジェクトの方が安全だと言っているので特に問題性がない」と。とても納得できず複数の造園業者や樹木の専門家に聞いたら「このような移植の方法は他に見たことがない」と。「たぶんこのやり方は矢野さんのオリジナル。たぶん来年までには半分は枯れるだろう」と。

その中で本移植という話。私は5月からほとんど毎日あの木々を見えています。先ほど矢野さんがあれを健全である、芽吹きしているからいいんだと言いましたが、決してそんなことはありません。何本かの木はすでに芽吹きが止まって上の方から枯れてきているんです。そのこと、全然言わないじゃないですか。100パーセントとは言っていないよ。でも現実には数本が上から枯れてきているんです。どうしてこういうことをみんなに共有化しないんですか（「していましたよ！」という声が複数あり）。こういう現実をちゃんと認識して本移植の話はしないとダメなんですよ。

今日いっぱい言いたいことはあるんだけど、先ほどお配りした冊子の方にまとめました。

どうしても言いたいのは、本当に子ども子どもと言うならば、子どもの安全性を最優先した時に、あの木が一体どういう役割があって、どういう危険性を帯びているのかを、ちょっとでもいいから検討する必要があるんです。

人間なんてものは自然を律することはできないわけです。大きな地震や台風これからだって遭うかもしれない。いつ何時グラッと来たら、あの程度の強化策をやったところで、何トンもある木が向こう側に落ちこまないなんてことはちょっと考えにくい。私自身が一回倒木に遭っていて、倒木なんてものはゆっくり来るんじゃない、いっぺんにドドッと来るんですよ。逃れることもできません。そういう状態を学校の中で再現していいのか、私の中での命題です。

司会 B どうもありがとうございます。いろんな意見があると思います。この場で終わらないと思っているのでメモしているんです。100パーセントではない、ということも聞いています。どれを残すか、というときに、ここからのフィルターの中で考えていきます。「枯れている木を戻してください」とは子どもたちも言わないので、そのフィルターにお力を貸してください。

大人参加者 H 富士見台4丁目に住んでいます。今日は実地で観せていただいてすごくよくわかりました。私の周りにも二小の木がすごくたくさん伐採されることを心傷めている元二小保護者がたくさんいます。本移植のことで、先ほど2本というのを伺って、さすがにそれはないでしょう、と思います。できるだけ多くの木を二小に残していただきたい。2本という決定は、今どのレベルで判断されているのか、伺いたいです。担当レベルなのか、部レベルなのか、市長、教育長レベルなのか、そこはもう承認が出ているのか。

大人参加者 I 二小の改築マスタープラン協議会の一人です。責任もあるので見守ってきました。昨日、二小のインクルーシブの会があり、参加してきました。こういうとき、対立しないのは大事なんだよ、批判しないのは大事なんだよ、と聞いてきたので、そんなふうになりたいです。実はマスタープラン協議会の時に子どもたちのアンケート、保護者のアンケートもとりました。その中では「樹木を残してほしい」というのがトップにありました。協議会の中でも、そうしましょう、という方向に行っていました。でも、実際、こんなに伐るといことは、マスタープラン協議会の人たちにも報告がなかったです。説明会に来てください、というのはありましたが、こういう方向に動いていますよ、というのは全くなかった。子どもたちもたぶん、これだけ伐るといのは知らなかったんです。ゴールデンウィーク明けに伐ることになっていたらどうだったかと思うとザワザワします。マスタープランの時に、「自然豊かな学校に」「五感を使った教育にしようね」というのが出たはずなんです。

今、学校はほぼクロムブックというパソコンを使ってやっていたりします。二小の良さは、「秋を見つけよう」とか、学校内で全てが賄える環境にあったと思うんですね。クロムブックでは金木犀の香り、桜の木の肌とか感じることはできないのですが、この学校ではそれができています。果樹もいっぱいあるので、1年生がみかんを収穫して6年生にプレゼントするとか、校長先生が葡萄を収穫して葡萄屋さんをやるとか、この学校はできていた。そういう一番大事なことから軸がブレないように進めていただけたらなあと思いました。

たとえば、木を守ろうねとなったのなら、「これ、危険だよ」というのが出てきた時に、それをどうするかを考えていければいいのではないかなと思いました。

主役は子ども、というところを進めていただけたらと思っています。

大人参加者 J 息子二人が二小に通って、来年4月に孫が入学します。夫も二小の卒業生。私が一番引っかかったのは、発足した時から前田さんが映像を回されていたことです。映画ありきでプロジェクトを進めないでほしい。やめていただきたい、というのがまず一点です。

それから総務文教委員会で、営繕課の課長さんが一個人（技術屋）としての意見だけれど、あそこに置かれている樹木を1日も早く本移植してほしい、撤去してほしいと仰った。そういう意見が出たことは市役所内ではどのように消化されているのかを伺いたい。

大人参加者 K 子ども三人を国立で育てた元保護者です。こういう計画って、どんどん経済効果の方向に行きがちだと思うのですが、今私たちが抱えているのは気候変動の問題。樹木が大事ということは専門家が随分昔から言っていると思うのですが、みなさん耳を塞いで経済の方向に行くから温暖化も進んできたんじゃないかと思います。今、ここまで学校の建て替えも始まっていますが、いろんな意味で一度立ち止まる、もう一回考え直すことは絶対に必要なんだと思うんです。

国立じゃなくて、こういう活動は他でやってください、という意見が前の説明会で出ましたけれど、ここでやるんですよ。ここでやって、みんながしっかり気候変動を止めよう、樹木を大事にしよう、という気持ちを持たないと、一つ一つの活動が重ならない限り、地球はどんどん沸騰すると思います。

本移植、この校内に2本や3本の話じゃなくて、植えられる可能性のあるところには、1本でも2本でもたくさん植えたらどうですか。新しい苗木を買ったのだったら、返したらいいじゃないですか。それよりはここからどこかに移植しなければいけない木を大事にする方向に戻ったらいいじゃないですか。

最後に発言してくれた子どもの意見、新しい木じゃダメなんだ、という意見、泣けました。本当に木は生きているし、経済効果より大事なことで、あると思います。

司会 A ありがとうございます。発言してくださった子どもも、皆さんも、みんな当事者ですね。みんなが納得する形で市教委さんとも話をしていけたらいいなと思っています。いただいた質問にいくつかまとめてお答えできればと思っています。市教委さんへ、浮いた費用のこと、ガイドラインのこと、2本の根拠、決定のレベル、土留についての営繕課長の発言のその後について、お願いします。

教育委員会教育施設担当課長/島崎 まず、今回プロジェクトさんにやっていただいたことで浮いた費用があるんじゃないかというご質問です。第二小学校の工事というのは、非常に長い期間の工事になっており、令和5年3月に契約、5月ゴールデンウィーク明けに着工いたしました。建築工事につきましては、令和8年度までの契約になります。建設工事というのは、どれもそうですが、地下を掘ると地下構造物が出てきたり、いろいろな不確定要素をもった性質のものになります。その中で軽微な調整含めて、金額、内容を調整していく性質のものとなります。今回、仮移植を行っていただいた分というのも、そういう性質のものと考えております（「わからないです」という声あり）。

次に、安全性についてのガイドラインですが、本移植を行うにあたっては、小学校になるので児童の皆様の安全対策が大前提となります。国が示す基準であるとか、東京都の仕様書、そういったものを踏まえて、今後は樹木匠さんに樹木匠診断をしていただくことも考えております。ご意見をいただいて、プロジェクトさんとも協議をしながら、工法を検討してまいりたいと考えております。

次に、2本の根拠ですが、プロジェクトさんからこのお話をいただいた時に、なるべく木のいのちを繋いでいきたい、環境教育に資するものにしていきたい、という理念に共感いたしまして、進めてきたものでございます。その中で、建て替え工事の支障にならないというのが前提となっています。この建て替え計画というのは、議会の承認をいただいて進めているものでございます。その計画の中の植栽の計画に支障がない範囲で植えられる範囲というのは教育委員会として判断したところ、2本程度が限界であろうというところでお話をさせていただいたところです。どのレベルで、というご質問に関しては、この敷地を管理している教育委員会としての判断でございます。

最後に、建築営繕課長の発言ですが、仮移植している場所と道路の間で高さの違いがあり、そこに土留めのコンクリート擁壁があって、その上に仮移植樹木が置いてあり、その重さが負荷としてかかっていることは事実であると思っています。そのことによって何か異常なことが起こっているかというのは、私共のほうでも定期的に調査を行なって、現時点ではそういうことは見当たらないという形です。ただ、負荷がかかっている以上は、プロジェクトさんと協議を行なって、スケジュールを組んで、本移植を含めて仮移植樹木の移動をしていく必要があると認識しているところです。以上です。

大人参加者 L 先ほどの浮いた費用、既存の樹木を移植したことによって、実際の植栽計画は変わっていると思うし、整地費用が変わっている。その辺の工事費用が変わってきていることについて、それについてはどうなのか、伺いたい。

教育委員会教育部長/橋本 実際に額が変わってきているのは事実だと思います。その詳細がいくらか、整地費用は、というと、現在は仮の整地で今後本格的な整地をしていきますので、今後諸々調整していくというのが現時点での状況です。

大人参加者 E ガイドラインについてですが、本移植には、まだ決定ではないが、ガイドラインに沿ってやりますよ、と言っていますが、仮移植についてはガイドラインに今沿っている状態なのでしょうか。

司会 A 費用についてはご意見として承って、フォローしていこうと思います。ガイドラインについては補足で、プロジェクトさんに戻していいでしょうか。

押田 ガイドラインというのは、造園屋さんにしてみれば基本的なことばかりで、移植の木について根鉢の大きさというのは定められていませんし……（「定められています！」という声あり）。

プロジェクト事務局長前田 （一財）日本緑化センターが出している公共用緑化樹木等品質寸法企画基準（案）というのがあって、これが国土交通省や東京都の基準になっているようです。その一番最初に、「また、本基準は公共施設等の緑化にあたって、本樹種を使用する場合の一つの基準を示したものであるが、地域あるいは造成計画上の特性等による他の樹種の使用、あるいは本寸法規格以外の使用を妨げるものではない」と書いてあります。

日本緑化センターの方に電話で問い合わせたところ、「これは新しく造成した土地に新しく若木を植える際の納品時の基準であって、個々の樹木の移植などに適用するものではありません」という回答をいただいています。自治体によってかなり大きな巨木を移植しているところは実際あって、根鉢が取れなかったら支柱を立てる、木杭を打つなどして安定性を保つのは造園家さんの技量です、という回答も得ています。

司会 A 時間のこともありますので、これは HP 等で確認できるのですよね、一旦このテーマは置かせてください。締めで、何かひと言付け加えたいとか想いなどありましたら、お願いします。

矢野 今回の移植をやらせていただいた根拠となったのは、皆さんにお配りした息子が書いた文章にもあるコナラの移植です。約 20 年前にこの国立の大学通りの歩道の脇にあった高木のコナラが、マンションの建設に伴って伐採されることになり、市民の方がなんとか生かしたいと依頼があって、この工事をやらせてもらいました。近くの大学通りの緑地帯に、行政の許可もいただいてやらせてもらったんですが、ここに問題があって、3.5m の大きな穴を掘った一番最後の段階で硬盤層と言われる礫層に泥水が流れ込んで不透水層を作る状態が発生したんですね。

時間の制限がある中でこれを破れず、その後、2 年目の夏、この硬盤層の通気不良が徐々に問題を起こして最終的にこのコナラが枯れたんです。

このコナラが教えてくれたこと。この国立の河岸段丘の礫層の、空気や水の通りのオリジナルな状況をふまえて、高木を移植するということは、業界にとっては地下の状態を測る一つの大事なデータなんですね。これをふまえて高木移植にあたらないと、多分移植はうまくいかないというのが私たちの中であって。

その後、コナラは第三公園に入れさせたもらったんですが、枯れた木を横に寝かせて、その周りに新たな中木と下草、低灌木を配置して、第三公園のマイナスだった脈の部分ケアさせてもらって、今も第三公園にあります。この 20 年で何が起きたかということ、第三公園のグラウンド全体の改善が、具体的に見えるんですね。これをもとに国立の教育現場の環境をどう作っていくかに活かせる。地上だけではない大地の中を含めた総合的な場づくりとしての、環境測定、環境科学をみんなで議論していく場になればいいと思ってやらせていただきました。

前田 いま映画のことで「やめてもらいたい」という声があがったのでひと言だけ。そもそも、「映画ありき」で始まったものではありません。私たちでお金集めないとうとうどうしようもないね、というところから、クラファンをするにはリターンが必要なのですが、いま共同代表を務める中谷が「記録映像を撮ってエンドロールにお名前記載でいいんじゃない？」というところから始ま

ったものです。いま、こういう状態になると、これが映画になるかどうかなんて全く見えません。この先どういうことになるか、誰もが嫌な思いを残さないようにいけば、社会的なメッセージにもなりますし、国立市にとっても誇りになることだと思いますので、撮り続けたいと思いますが、いまは全くわかりません。何か敵対しているような構図に見えるようなものは作りたくありませんので、そこだけご理解いただけたらと思います。

森田 今日に来てくださって本当にありがとうございます。皆様方の心からのお声が聞けたことが私たちにとってはありがたいですし、今後も、仮移植から本移植へと進んでいきますけれども、是非皆様に関わっていただいて、納得していただくような形になるよう努めたいと思っていますので、今度ともどうぞよろしくお願いいたします。

以上